審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　名　福田崚

地方圏における産業立地を促進し水平型の国土構造をいかに実現するかが国土計画・地域計画における重要な課題となっている。このような背景のもとで、本論文は、企業と他主体との間の紐帯に着目し、日本の企業データを用い基礎的な定量的分析を行ったものである。特に、低次のイノベーションという概念を導入することにより、広範な企業を対象とすることを可能とした点、紐帯という視点の導入、都市政策と産業政策の統合という視点の導入という点に新規性がある。

研究の構成は下記のとおりである。第一章では既往研究のレビューを通じて本論文の位置づけが示されている。とりわけ、紐帯を分析する視点として、知識経済化の進展の中で重要性がとみに高まっているイノベーションを提示し、イノベーション研究における論点を紐帯の視点から再解釈し、独自の分析の枠組みを提示している。第二章では、今日に至るまでの産業政策と都市政策のレビューを行い、紐帯という視点により、暗黙的な紐帯に基礎をおいた政策を拡大する余地があること、用途混合を進め両者を統合した政策を展開する余地があることを示した。第三章で、理論・実証、計画・政策それぞれからの位置づけを統合し、本稿の課題と構成を明らかにしたうえで、第四章から第八章において実証分析を展開している。

第四章では、企業間の明示的紐帯に着目し、国土構造を明らかにし、東京への一極集中的なヒエラルキー構造が成立していることを示した。第五章では取引相手や金融機関との紐帯が企業の立地選択に及ぼす影響を分析している。この分析を通じて、取引相手・金融機関、また移転先の選択・移転するかどうかの決定のいずれにおいても、紐帯が影響していることが明らかになったが、その中でも特に立地選択への影響が大きいのは、移転するかどうかの選択における金融機関との紐帯で重要となることを示した。

第六章では、都市内立地と都市内で提供される暗黙的紐帯に寄与する場の存在、そしてアウトプットとして生じるイノベーションの三者の間の関係について分析を展開し、低次のイノベーションの観測、知的スピルオーバーの場への着目、複数の知的スピルオーバーのスケールの比較を行っている。この結果、低次のイノベーションに対して都市内で集積に近く立地することの寄与が明らかになった。さらに、知的スピルオーバーの場の存在は都市圏全体のイノベーションを促す効果を持つことを実証的に示している。またイノベーションの性質によりどのような都市的環境が有効であるかを示した点も特筆される成果として挙げられる。第七章では、長期的な視野を持った分析を展開し、企業経営者の出身地とのつながりに着目した分析を行い、地方に立地する企業のイノベーションについて、多様性が低次のイノベーションに対応し、大都市圏からのキャッチアップが高次のイノベー

ションに対応していることを示した。第八章では、前章までの分析を踏まえ、３００社以上の企業の社史を用い、そこで提供されている豊富な情報をもとに議論を展開している。分析を通じて、人的資本に限らず、社会関係資本が創業時のイノベーションに大きく貢献していることが確認された。

本研究の重要な学術的貢献として、イノベーションという視点で見た紐帯と企業立地について、第一に、既存のネットワークや企業立地を固定する要因として明示的な紐帯が機能していることを実証的に示したこと、第二に、地方圏への新たな知識の導入・発生に対する暗黙的な紐帯が重要であることを実証的に解明したこと、第三に、明示的な紐帯と暗黙的な紐帯、臨時と安定が複合的に作用した場合のイノベーションへの貢献の大きさを実証的に示した点、第四に、低次イノベーションに対する地域的に近接して立地することのメリットを実証的に示したことが挙げられる。加えて、分析を通して得られた政策的示唆として、ボトムアップの国土政策の重要性、とりわけ暗黙的な紐帯に基礎を置いた政策の重要性を指摘したことは実践的な意義が大きい。

本研究は、上記のように、独自の理論枠組みと詳細な実証分析のもとで、イノベーションの視点からみた企業間のつながりと立地についての詳細な分析をおこなった新規性のきわめて高い研究であり、学術的に優れた価値を有していると同時にきわめて有益な政策的含意を提示するものとなっている。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。